



Title	福島県郡山市方言の推量・意志表現バイ：若年層における確認要求表現への変化
Author(s)	白岩, 広行
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2008, 42, p. 37-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6330
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

福島県郡山市方言の推量・意志表現バイ

—若年層における確認要求表現への変化—

白 岩 広 行

1. はじめに

郡山市を中心とした福島県中通り地方の南部では、推量・意志の表現としてバイという形式が用いられている。このバイは東日本に広く分布する推量・意志表現「べ」に由来するものであり、伝統方言の体系では「べ」の丁寧表現にあたるものとして機能してきた（本稿では読みやすさを考慮して「べ」には

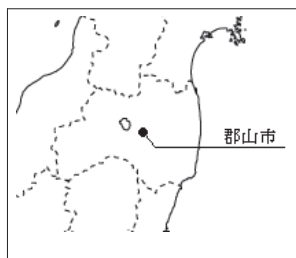


図1 郡山市の位置

カギカッコをつけて表記する)。ところが、現在の郡山市若年層のバイを観察すると、従来のバイにはなかった新たな特徴が見られる。つまり、若年層のバイは、「べ」の丁寧表現としては使われにくくなり、一方で、「これでいいバイ？（これでいいでしょ?）」のように、主に聞き手への確認を求める場合に限って使われるように変化している。

本稿では、伝統方言と若年層方言を比べることによって、バイに起こっているこの新たな変化について論じる。このような論考は、推量や確認要求に関わる形式に生じた言語変化の一事例としても、また、現代若年層における方言運用の実態を見るうえでも意味のあることと考えられる。

なお、本稿では、まず2.節で伝統方言におけるバイの特徴を形式の成り立ち、および統語面、用法面、待遇面の特徴から記述する。その後、若年層で

起こっている変化を 3. 節で記述し、4. 節で全体の考察とまとめをおこなう。

2. 伝統方言の場合

2.1. バイの成り立ち

飯豊（1964）は、バイという形式の成り立ちについて次のように述べている。つまり、郡山市をふくむ福島県の中通り地方では、丁寧表現として文末詞イが使われているが、このイは種々の文末詞類に後接し、次のように丁寧表現を生み出している（カ、「ベ」は文末以外にも生起するが、便宜上「文末詞類」としてまとめて呼ぶこととする）。



図2 イによる丁寧表現の派生（飯豊 1964 の記述を筆者が図にしたもの）

このうち、推量・意志の「ベ」に丁寧のイが後接したものがバイにあたる。飯豊の記述によれば、「ベ+イ」が「バイ」という形になるのは、次の 2 つの理由による。

- a.) 「ベ+イ→ベイ」としても、もとの「ベ（ー）」と区別がつきにくい。
- b.) ナイ、カイ、ワイなど、イをふくむ丁寧表現がほとんど「-ai」の形をとることからの類推で、「ベ+イ」の表現も「-ai」の形になった。

このような飯豊の説明は、バイという形式がイという音をふくむこと、また、2.3 節でも確認するように、伝統方言においてバイが「ベ」の丁寧表現として機能していることから妥当なものであると考えられる。

2.2. 調査方法

伝統方言のバイを記述するにあたっては、以下のふたつの手法を用いた。

a.) 民話資料の用例調査

菅野（1982）によれば、パイは郡山市を中心として福島県中通り地方の中南部に広く分布している。本調査では、これらパイの分布域で発行された民話資料をもとにして、パイの用例を拾い出すこととした。対象とした民話資料は以下のとおり。

『郡山市のむかしばなし』郡山市教育委員会編・発行（1984）

『ふねひきのざっとむかし』船引町教育委員会編・発行（1980）

『東白川郡のざっと昔』ざっと昔をきく会編・ふるさと企画発行（1986）

（以下、それぞれ『郡山』、『ふねひき』、『東白川』とする）

これらは、いずれも明治・大正生まれの語り部の語った民話を集録したものである。このうち、『ふねひき』『東白川』には、「テープレコーダーにより録音したものを、原則として語り口のとおり筆記した（『ふねひき』巻頭ページ）」「テープレコーダーの録音を加除したり、作為的に語り口に手を入れることはしていない（『東白川』p.224）」という記述があり、語り部の発話をほぼ忠実に文字化したものと考えられる。また、『郡山』は、民話採集員による再構成が含まれるが、採集員のほとんどは明治・大正生まれの地元の人間である（編纂当時の関係者に聞いて筆者が確認した）。したがって、これらの民話資料は、明治・大正生まれの話者の使用する方言の実態をほぼそのまま反映したものと見なしうる。

なお、同じパイ分布域の中でも、地点ごとにパイの特徴に多少の差異が見られることがあったが、その差異については記述の際に簡単にふれる。

b.) 昭和初期世代への面接調査

昭和初期生まれの高年層話者男女1名ずつを対象に、内省調査をおこ

なった。話者の属性は以下のとおりである。

表1 高年層話者の属性

	生年	性別	居住歴（数字は年齢）		調査年
HO	1927 年	女性	0-23 福島県三春町*	23-77 福島県郡山市	2004 年
HE	1940 年	男性	0-64 福島県郡山市		2004 年

* 三春町は郡山市の隣町でパイの分布域。

2.3. 統語的特徴

2.3.1. 文内の位置

まず、パイの生起する統語環境について述べる。本調査であつかった民話資料中には、パイの用例が全部で 48 例あったが、そのすべては文末のもので、従属節内（引用節をのぞく）に生起したものは 1 例もなかった。高年層話者の内省でも、パイは必ず文末に生起するものとされる。これはパイの成り立ちに関わるイが文末詞であり、パイが敬意という聞き手めあて性を持つためだといえる。この点で、「べ」とパイは異なる。

- 1) 便所のことね、手水^{ちょうず}、手水つうのは、便所のことを言うんだっばい。
(と言ったのでしょうか)
ええ、殿様の言葉だっべから。え、まあ侍は手水ってったんだっばい。
い。ま、今のトイレ、便所のこと。 (『東白川』 p.50)

2.3.2. 他の文末詞との共起

民話資料中のパイにはナ、ゾなど、他の文末詞と共起した例が見られず、高年層話者の内省でも、パイと他の文末詞との共起は不適格とされる。

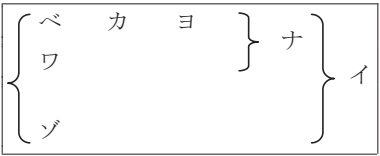


図3 文末詞類の承接関係

これは、この方言における文末詞

類どうしの共起関係が図3のようにになっているためと考えられる（この図は、民話資料中の文末詞の表れ方、および高年層話者の内省にもとづくものである）。つまり、これら文末詞類のうち、文の内側に位置する「べ」と文のいちばん外側に位置するイとの組み合わせがバイであるために、「*バイナ」「*バイカ」のような承接のしかたは許容されないのである（そのような場合「ベナイ」「ベカイ」が適格である）。

2.3.3. 述語との承接関係

バイは動詞に対しては終止形にそのまま接続する。ただし、終止形が /-ru/ で終わる動詞の場合、その促音化をとまなう。

2) 俺、猿の処さ行くばい。 (『郡山』 p.33)

3) 馬は何で人蹴つとばすんだっぺ、なんつう話もあっぱい。

(『東白川』 p.137)

形容詞に対しての接続は、民話資料中では「熱かっぱい」のような「-カッパイ」の形が見られたが、高年層話者の内省では終止形にそのまま接続する形を使うという。また、名詞述語の場合は、民話資料中には「N ダッパイ」「N ダバイ」の2つの形が見られたが、高年層話者の内省では「N ダバイ」の形をよく使うという。

4) お湯ついでもらったら^(あついでしょう)熱がっぱい? (『東白川』 p.28)

5) 仕事終わったから、もう遊びに行ってもいいバイ。 (HO の内省)

6) それ、親だか何だか教える訳だっぱい? (『東白川』 p.42)

7) そしてまあ、二つ三つになったころだばい。 (『ふねひき』 p.6)

以上について、民話資料よりやや世代の下る高年層話者（昭和初期生まれ）の内省では、「ーカップパイ」「N ダっパイ」のような、接続にあたって述語を活用させる形は古い形として認識されている。東日本諸方言の「べ」については、井上（1985）が「接続の単純化」の傾向を指摘しているが、その記述とあわせて考えても、「ーカップパイ」「N ダっパイ」のような形は古い形で、終止形にそのまま接続する形が新しい形と考えられる。これらをまとめると、パイと述語成分の承接関係は下の表のようになる。

表2 伝統方言パイの述語成分との承接関係

	新しい形	古い形
動詞（非ル語尾）	行くパイ	
動詞（ル語尾）	あっパイ	
形容詞	熱いパイ	熱かつパイ
名詞述語	N だパイ	N だっパイ

なお、形容動詞については、民話資料中には用例が見られなかったが、高年層話者の内省によれば名詞述語の場合と同様のようである。また、地点による差として、民話資料のうち、『郡山』『ふねひき』には新しいほうの形が多く見られたが、『東白川』には古い形が多く見られた。

2.4. パイの用法

ここでは、伝統方言のパイがどのような用法で使われていたかを確認する。2.1 節で見たとおり、パイは「べ」に由来しており、「べ」に対応する丁寧表現と考えられる。そこで、パイの用法を整理するために、仙台市方言の「べ」に関する玉懸（1999、2002）の記述や東日本諸方言の「べ」を

表3 パイの用法

ダ ロ ウ 相 当	推量		(交差点で道をきかれて) うーん、たぶんこっちだパイ。
	疑い		(友人と道に迷って) ねえねえ、ここ、どこだパイ。
	確認 要求	命題確認	(お菓子を友人に分けて) このお菓子、うまいパイ。
		知識確認	(道案内で) ほら、あそこにポストがあっパイ。
イ ウ 相 当	意志		宿題まだ終わってないけど、今晚中にはやっパイ。
	申し出		(道案内を申し出て) そんじゃ、ついて行ってやっパイ。
	勧誘		(道に迷って) ねえねえ、あのおじさんに聞いてみっパイ。

記述した橋本（2004）を参考にしつつ、表3のような枠組みを考えることとする。

この枠組みでは、パイの用法を推量系（標準語のダロウ相当）と意志系（標準語の～ウ相当）に大別している。そのうち、推量系については、単純な〈推量〉のほかに、疑問文に生起して話し手の疑念をあらわす〈疑い〉と聞き手に確認を求める〈確認要求〉の用法を立てた。〈確認要求〉の中には、推量した命題の真偽を相手に確認する〈命題確認〉、すでに自明のことを提示して相手にその知識を確認させる〈知識確認〉の用法が含まれる（〈推量〉と〈確認要求〉については、三宅（1996、1997）など標準語

- 15) 忙しいなら、代わりにおれが行く {ベ／バイ}。 【申し出】
 16) 明日いっしょに温泉に行く {ベ／バイ}。 【勧誘】

上の例文に示すように、「ベ」は全ての場合に使用可能だが、バイは聞き手のいない場面では使用できない。これは、バイが本質的に丁寧表現であるためと考えられる。また、聞き手の有無にかかわらず〈疑い〉では使用できないが、標準語のダロウカについて仁田（1991）が述べるように、推量形式による疑いの表現は（たとえ聞き手がいた場合でも）基本的に独話的な性格を持つ。したがって、バイの使用が不可になる条件は、その文が独話的であるという一点でまとめることができる。

一方、聞き手めあて性のある文の場合、バイは「ベ」と同様に問題なく使用可能である。したがって、バイは基本的に「ベ」と同じ用法で用いられているが、聞き手めあて性の希薄な場合には使用できなくなるとまとめることができる。

2.5. バイの待遇的特徴

飯豊（1964）によれば、バイ、ナイなどをふくめた「～イ」という丁寧表現は、村長、医者、先生など、身分の極めて高い人にも使われる形式である。民話資料中にも、百姓の「婆さん」が「大岡様（奉行所の大岡越前）」という身分の高い人物に対してバイを用いる例が見られる。

- 17) 「それだら婆さん、ねずみの通る穴を、ねずみの穴と何して言うんだ」
 と大岡様が言ったと。

「何でって、ねずみが通ったからだばい」と婆さんが言ったと。

（『郡山の民話』 p.299）

このように、伝統方言の体系においては、バイは典型的な丁寧表現として機能していたものと考えられる。

しかし、昭和初期生まれの高年層話者によれば、バイが典型的な丁寧表現として機能していたのは、標準語の浸透していなかった昔のことであるという。現在では、丁寧表現としては標準語形のデショウ、～マショウを使うのが一般的で、会社の上司など、明らかに目上といえる人物には、バイは使えなくなっている。

しかし、「べ」とくらべるとバイのほうがより丁寧という意識は残っており、身内あるいは目下の聞き手であるほど、バイより「べ」が用いられやすい。その使い分けを整理すると表4のようになる（同様の傾向は、同じく郡山市の高年層を対象にした伊藤（2007）でも指摘されている）。

表4 相手による「バイ」／「べ」の使い分け

	身内	身内以外
目上	父親、母親など	会社の上司、学校の先生など
	バイ	デショウ／～マショウ
同等	兄弟など	友人、会社の同僚など
	べ	バイ
目下	息子、娘、孫など	会社の後輩、近所の子など
	べ	べ（男）・バイ（女）＊

＊男性話者の HE は「べ」、女性話者の HO はバイを使うと内省

2.6. 伝統方言におけるバイの特徴

- 以上、伝統方言におけるバイの特徴を簡単にまとめる。
- a.) 形式の成り立ち
- バイは推量・意志の「べ」に丁寧のイが後接してできた形式である。

b.) 統語環境

バイは必ず文末に他の文末と共に生起する。また、述語に対する「接続の単純化」の傾向が相対的に下の世代で見られる。

c.) 用法

「べ」と同じ用法を持つが、聞き手めあて性の希薄な場合には使えない。

d.) 待遇面

元来、丁寧表現として使われる形式であった。しかし、標準語形の普及につれ、丁寧表現としては使われにくくなりつつある。

3. 若年層の場合

ここでは、若年層におけるバイの使用実態を把握し、伝統方言からの変化について記述をおこなう。まず、3.1 節で使用するデータについて述べたあと、統語面の特徴について確認し（3.2 節）、用法面（3.3 節）、待遇面（3.4 節）での変化を記述する。最後に 3.5 節でまとめをおこなう。

3.1. 調査方法

若年層話者に対しては、少人数の話者の内省を深く探る面接調査と、多人数に対するアンケート調査の 2 通りの調査をおこなった。

a.) 若年層話者への面接調査

郡山市内で言語形成期を過ごした 4 人の若年層話者を対象に、内省を尋ねる面接調査をおこなった（次頁の表 5）。

b.) アンケート調査

郡山市内の高校で、バイを用いた例文（p.7 の表 3 で掲げた例文と同じもの）に対する簡単な内省調査をアンケート方式でおこなった。回答者は郡山市およびバイ使用域にあたる近隣市町村在住の高校生 89 名（男性 25 名／女性 64 名）。

表5 若年層話者の属性（面接調査）

	生年	性別	居住歴（数字は年齢）		調査年
YE	1984 年	女性	0-18 福島県郡山市	18-19 大阪府池田市	2003 年
YM	1982 年	男性	0-4 茨城県水戸市 7-9 福島県原町市 18-20 京都府京都市	4-7 福島県郡山市 9-18 福島県郡山市	2003 年
YZ	1981 年	男性	0-7 埼玉県庄和町 19-23 宮城県仙台市	7-19 福島県郡山市	2004 年
YW	1982 年	男性	0-3 福島県いわき市 8-22 郡山市	3-8 福島県猪苗代町	2004 年

3.2. 統語的特徴

伝統方言の場合と同様に、バイは必ず文末に他の文末詞と共に起せずに生起することが確認された。また、述語に対する接続は、表2で「新しい形」として挙げたほうの形が使われている。

3.3. 用法面での変化

表3に示した各用法についてバイを使うことがあるかどうか、面接調査で若年層話者に尋ねた結果の一部を、高年層の場合とあわせて次頁の表6に整理する。個人差はあるものの、概して、〈確認要求〉以外の用法では「バイ」が使いにくくなっているようである。一方、紙数の都合で表には示さないが、「べ」は特定の用法にかたよらず使われている。

この傾向は、アンケート調査の結果からもうかがえる。次々頁の図4は、表3に掲げたのと同じの例文を使用し、その文を使用するかいなかをアンケート調査で尋ねた結果である。

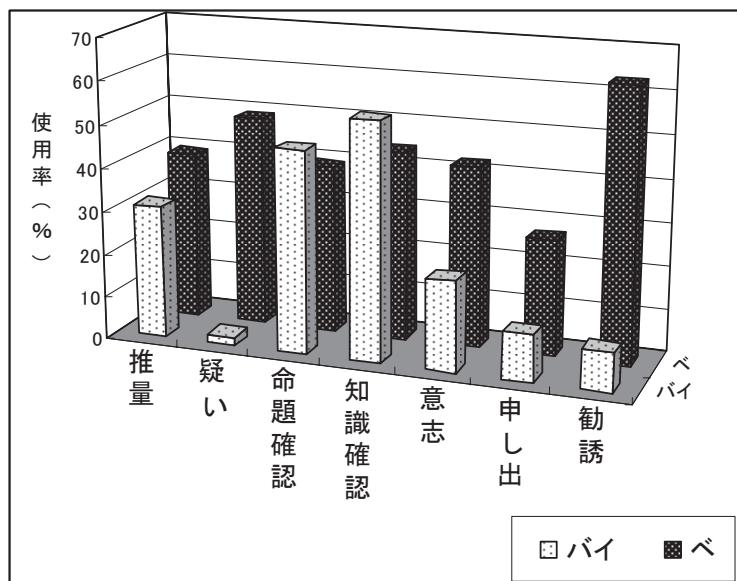


図4 「バイ」「べ」の用法ごとの使用率

「べ」がどの用法においてもある程度高い使用率を持つのに対し、バイは〈確認要求〉(命題確認・知識確認)以外の用法での使用率がかなり低くなっている。

以上の結果から、若年層のバイはおもに〈確認要求〉の用法に限って使われる傾向にあると考えられる。

3.4. 待遇面での変化

面接調査の結果として、いずれのインフォーマントもバイを丁寧表現とは認識しておらず、「目上の人間には使えない」という内省が得られた。丁寧表現としては標準語形のデショウ、～マショウが使われており、どの話者もバイが丁寧表現であったこと自体を知らない。また、バイも「べ」も、ともに「親しい友人に使うことば」として認識されており、高年層のよう

な相手による使い分け（表4）は曖昧になっている。

しかし、パイが本来持っていた聞き手への敬意は、「べ」とのイメージ・語感の違いとして保たれているようである。例えば、「べ」よりもパイのほうが「やさしい、親しい感じがする」（YW）、「気づかいがある」（YZ）といった内省が得られている。このようなイメージは、パイが丁寧表現であったことの名残といえそうである。

3.5. 若年層における「パイ」の変容

以上、パイの変容については次のように整理される。

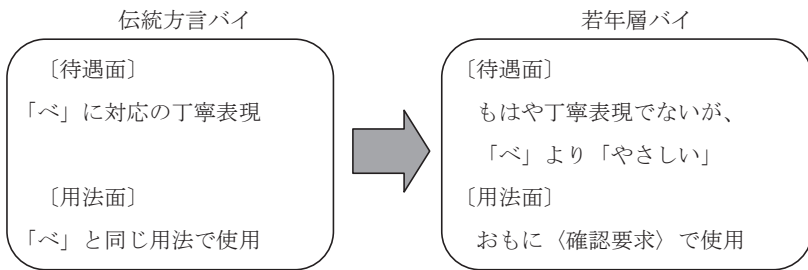


図5 パイの変容

4. 考察とまとめ ―なぜ「パイ」は変容したか

上述のような変容がなぜ起こったか、次のように考察したい。

まず、パイは、標準語形のデショウ、～マショウが普及したことによって丁寧表現としては使いにくくなった。昭和初期生まれの高年層話者も、現在ではパイを丁寧表現として使うことはまれであり、若年層にいたってはパイが丁寧表現であったこと自体を知らない。

しかし、もともと丁寧表現であったパイは、聞き手への敬意という特性

を失ったのちも、それに由来して、聞き手めあて性は維持していたと考えられる（このことは、必ず文末に生起するという統語的な面で端的に表れている）。このため、必ず聞き手を要する〈確認要求〉とはなじみやすかったのであろう。

さらにいえば、一方的に相手に確認を迫る〈確認要求〉という発話行為は、中北（2000）の指摘するとおり、聞き手に対して「無礼」「攻撃的」といった印象を与えやすい。そのような印象を回避するためにも、元来丁寧表現であり、現在も「やさしい」「気づかいがある」といった語感を残したバイが〈確認要求〉で使われやすくなったのではないだろうか。なお、同じことは標準語のデショウにもいえる。つまり、常体基調の談話であっても、〈確認要求〉の用法に限っては丁寧表現のデショウがよく用いられ、男性語的なダロウよりも、むしろニュートラルな確認要求表現として機能している（中北 2000）。

また、「べ」の丁寧表現と認識されなくなったため、バイは「べ」と同じ意味領域を担う必要がない。つまり、他の用法を切り捨てて〈確認要求〉に限って使われるようになって問題が生じない。このことも、バイの変容に制限をもたらさなかったという点で、ひとつの要因といえる。

なお、2.3.3 節でふれた述語への接続の単純化もこの変化と無縁ではないだろう。標準語のダロウ、デハナイカ、ヨネ、ネなどのように、談話的な機能を担う確認要求表現は、述語への接続が単純なことが多いように思われる。そのため、接続が単純化しているという形態的な特性が、〈確認要求〉へという意味的な変化の下地になっていることも考えられる（このように、井上（1985）のいう「接続の単純化」については、意味的な面からもアプローチする余地があると思われる）。

これらをまとめると、バイが〈確認要求〉で使われやすくなったことについては、バイが丁寧表現でなくなったあとも聞き手めあて性や「やさし

い」という語感を保っていたことが主要因として考えられる。また、「べ」と同じ意味領域を担う必要がなくなったために、この変化は制限されることはなかった。さらに、述語への接続の単純化もこの変化に関係していると考えられる。

上述の要因に加え、最後に、若年層話者の対話のスタイルに関連して、もうひとつの可能性を掲げておく。仙台市方言の確認要求表現ツチャを記述した玉懸（2001）は、「現代の若年層は、頻繁に相手の同意を求めたり確認したりしつつ対話を進める手法を好む傾向が強い」という可能性を指摘している。もしそうだとすれば、郡山の若年層話者は自分たちの嗜好する〈確認要求〉という対話の手法にあわせてバイを作りかえ、うまく活用しているのではないかという可能性も指摘される。しかし、若年層話者が本当に〈確認要求〉という対話の手法を好むのかについては一歩進んだ議論が必要であるため、ここでは可能性として挙げるにとどめておく。

以上、本稿では郡山市方言のバイについて、その変化を記述し、要因の分析をおこなった。

付記

本研究は、平成 19-21 年度文部科学省科学研究費特別研究員奨励費「現代諸方言に見る推量形式の用法変化 ―〈認識〉から〈伝達〉へ―」（代表者：白岩広行、課題番号 19・3699）による。

本稿は日本方言研究会第 81 回研究発表会での発表をもとにしたものである。発表の際には、様々な方からコメントをいただいた。また、国立国語研究所の竹田晃子氏から文献の提供を受けた。お世話になった方々に記して感謝申し上げる。

参考文献

- 飯豊毅一（1964）「福島県方言における対者尊敬表現について」『国語学』59
伊藤巧（2007）『福島県郡山市方言の文末詞「～ばい」と「～べ」の研究』奥

羽大学文学部卒業研究

井上史雄 (1985) 「現代東日本のペイの分布と変化」『新しい日本語 ―《新方言》の分布と変化―』明治書院

菅野宏 (1982) 「12 福島県の方言」『講座方言学 4 ―北海道・東北地方の方言―』国書刊行会

玉懸元 (1999) 「仙台市方言の『ペー』の用法」『言語科学論集』3 東北大学文学部

—— (2001) 「宮城県仙台市方言の終助詞『ッチャ』の用法」『国語学』52-2

—— (2002) 「仙台市方言の『ペー』の用法 (2) ―「推量」「確認」「確認要求」の用法をめぐって―」『国語学研究』41 東北大学大学院文学研究科

中北美千子 (2000) 「談話におけるダロウ・デショウの選択基準」『日本語教育』107

仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

橋本礼子 (2004) 『日本語諸方言における意志・推量表現の変化に関する研究』大阪大学博士論文

三宅知宏 (1996) 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89

—— (1997) 「「愛だろ、愛。」 ―推量と確認要求」『月刊言語』26-2

(大学院博士後期課程学生・日本学術振興会特別研究員)

SUMMARY

***Bai* in the Koriyama City Dialect of Japanese:
Change to Confirmation-seeking Expression in the Young Generation**

Hiroyuki SHIRAIWA

This article focuses on the usage of the modality marker *bai* in the Koriyama City dialect of Japanese. In the traditional dialect system, *bai* is used as the polite (honorific toward hearer) form of *be*, which functions as an conjectural, intentional, and adhortative marker and also marks the speaker's attitude to seek confirmation about old information of the hearer (the confirmation-seeking function is believed to be derived from the conjectural function). The analysis of the discourse data on old folk tales and interviews to old speakers shows that the function of *bai* is the same as that of *be*.

However, through the interview and questionnaire survey administered to young speakers, it is revealed that young speakers mainly use *bai* as a confirmation-seeking expression, and they do not use it with any other function so frequently, while *be* retains all its functions.

This change is explained as follows. In Japan, standard Japanese has spread widely especially after the war. With regard to the modality system of the Koriyama dialect, the standard Japanese forms of *deshoo* and *mashoo* have come to be used instead of *bai*, and *bai* is no longer recognized as the polite form of *be*. Therefore, *bai* is losing its original function corresponding to *be*. However, because of an old polite form, *bai* retains its hearer-oriented property and continues to be used frequently only as a confirmation-seeking expression through which a speaker confirms information from the hearer in a dialogue situation. Moreover, there is a possibility that young people prefer the communication style in which they confirm some information with each other frequently while talking.

キーワード：福島県郡山市方言，べ・バイ，推量，確認要求，言語変化